

トリチウム水、影響はほぼ皆無

がん社会 を診る

中川 恵一

なかにも存在します。

天然のトリチウムよりずっと少ない量ですが、原発でもトリチウムは必ず発生するため、国内外の原発から放出されています。

福島第1原発でも事故前は年間22兆ベクレルを放出管理目標値としていました。処理水の海洋放出では、この目標値と同じ年間最大22兆ベクレルを予定していますが、日本の降水中のトリチウムは年間200兆ベクレルを超えています。

中国の原発1基から放出されるトリチウムの量は年間100兆ベクレルを超える例も見られますから、中国の措置は一方的なものといえます。

処理水の海洋放出における国の安全基準は1ベクレルあたり6万ベクレルです。実際には40分の1の同1500ベクレルまで希釈して放出します。

福島第1原発では、ヒラメなどを放出濃度の同1500ベクレルに近いトリチウムを含む海水で飼育しています。

ヒラメの体内トリチウム濃度は、24時間で海水の濃度より1割ほど低い程度まで上がり、その後、横ばいになりました。通常の海水に戻すと、24時間で検出できないくらいの値まで下がりました。トリチウムが体内で濃縮されることはないわけです。

仮に1キログラムあたり1500ベクレルのトリチウムを含んだヒラ

メを毎日1キログラム食べても、年間の被ばく量は0.01ミリシーベルトにすぎません。さらに、処理水の放出地点から2〜3キロメートル離れたトリチウムの濃度は周辺の海水と同程度になりますから、影響はほぼ皆無といえるでしょう。

そもそも、私たちは毎日、放射線を浴びながら暮らしています。大地や宇宙から受ける外部被ばくと、食物中の天然の放射性物質や空気中のラドンから受ける内部被ばくを合計すると、日本平均で年間2.1ミリシーベルトになります。

さらに、日本の医療被ばくは2.6ミリシーベルトと世界トップクラス。自然被ばくと合わせることで、1年で5ミリシーベルト程度の放射線を浴びているわけです。海洋放出の影響は誤差の範囲といえます。

処理水の海洋放出の安全性は国際原子力機関や世界中の専門家が認めています。根拠のないいがかりはやめてほしいものです。

(東京大学特任教授)

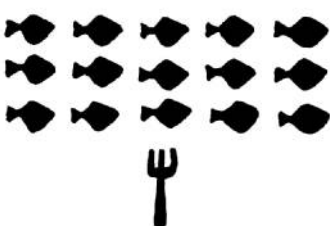


イラスト 中村 久美